

日露戦後における賀川豊彦の救貧事業

—「人格」を認めるということ—

布 川 弘

はじめに

賀川豊彦の神戸「新川」における救貧事業は、彼の自伝的小説である『死線を越えて』によって広く紹介されることになった。この小説は上篇の『死線を越えて』、中篇の『太陽を射るもの』、下篇の『壁のささやく時』の三部で構成されており、現在は、キリスト新聞社刊の『賀川豊彦全集』にもちろんおさめられているし、社会思想社の現代教養文庫に入っていて、手軽に読むことができる。

賀川の事業がいかなる意義をもったのかは、この『死線を越えて』という小説が当時の社会でどのように受け止められたのかを見るとよくわかる。『死線を越えて』は、最初『改造』という雑誌の一九二〇（大正九）年の新年号に掲載され、その年の一〇月に単行本として改造社から出版された。その反響はまず売れ行きに現れている。当時大阪毎日新聞社の神戸支局にいて、労働運動をはじめ賀川の事業における同志的存在であった村島

婦之によれば、最初から「大正九年に初版を出したのがわずか三ヶ月で三万部を売りつくし、一〇年一月に入って此度は五万部を増刷した」という売れ行きを示し、通算すると「上篇だけで三五〇版という驚異的売行」を見せ、一九二二（大正一〇）年一二月に中篇が刊行されると、たちまち二〇〇版を重ね、続いて発行された下篇も二〇〇版を重ね、最終的には「五〇万部を売りつくし約一五万円という少からぬ印税が入った」という。当時これだけの読者を獲得した小説はまずなかった。また、詳細な『賀川豊彦伝』の著者である横山春一によると、一九二七（昭和二年八月）に二冊一円の廉価版が刊行され、さらに円本の先駆けであった改造社の『現代日本文学全集』に、三部作が一冊にまとめられて入ったのである。これを見ると、単発的なベストセラーではなく、かなり息の長いベストセラーであったことがわかる。大正デモクラシーといわれる時代の代表作といってもよいであろう。

ではこの小説はどのような人に読まれたのであろう。雑誌『改造』の大正一〇年二月号の裏表紙に次のような記事が載っている。

明治大正に亘つて本書（『死線を越えて』上篇）ほど多大の感激を与えた小説はあるまい。東京の某小学校校長は本書によりて賀川氏の為人（ひととなり）を敬慕崇拜し、為に全財産を抛つて数百部を購ひ、恰く知己に頒ちて愛の教育、熱情の感化を本書より世に求め、又水戸の一青年は本書によりて、著者の博大の愛に感銘し、慈母を離れて遠く神戸に赴き、賀川氏の義弟となりて、一身を社会改造の為に投げ出し、文壇の雄片上伸氏は同じく本書によりて賀川氏の感激的生活を知悉し、その敬虔の態度、その熱烈なる人道的貢獻に思わず熱涙を垂れた。本書の感激は此等二三に止まらず、都鄙の青年男女が相率ゐて著者の崇高なる人格を愛慕し、その赤熱の活動振りを仰望するは、本書が出版二ヶ月ならずして十六版を尽したる実績によりて批判されるべきである³⁾。

また、村島婦之は前述の回想の中で、次のように『死線を越えて』を読んだ読者のエピソードを伝えている。

多くの純真な青年男女が貧民窟に賀川氏を訪ねて、あるいは奉仕を申し出て、あるいは求道者となつた。戦後に大巨となつた水谷長三郎氏やマスコミの大スター大宅壮一氏な

どもその一人で、両氏とも神戸の貧民窟の寒々とした説教所で賀川氏からキリストの弟子となる洗礼の式をしてもらった⁴⁾。

こうしたエピソードを見ると、当時の多感な青年層に与えた影響がうかがえ、青年層の読者が多かつたのであろうことが推測できる。また、ある程度の学歴に恵まれた青年だけではなく、小学校出て社会に出て働いた青年たちにも熱烈に読まれたよう⁵⁾で、書店でむさぼるように立ち読みする丁稚どももいたという。こうした読者は、『死線を越えて』という小説のどこにひかれたのであろうか。当時国民新聞の主筆で大正・昭和の屈指のジャーナリストであつた馬場恒吾は、『死線を越えて』を評して、次のように述べている。いささか長くなるが、非常に適切な評價だと思われるので引用してみる。

賀川豊彦氏の新著『死線を越えて』は小説体に書いてはあるが、読んで行く内に、著者の自叙伝を読みつつかある感がした。所謂、専門小説家の目から見れば、抒情抒事の間に歯がゆい点があるかもしれぬ。併し、此書の使命は小説以上であることを感得せずには居られぬ。

主人公が神戸新川の貧民窟に飛込んで以来の記事は、人生の矛盾、悲惨、罪悪を最も現実的に抽出している。主人公の周囲に集まり来る人々は皆人生の落伍者である。社会が有する欠陥と其人々の有する自身の欠陥の為に、精神的

に、物質的に、肉体的に墮落しているもののみである。主人公の家に泊めて呉れと云ふ者は大抵結核性の半死半生の男である。或は足腰の立たなくなつた淫売である。主人公の救を求めらるるは、子供が死んで葬式が出せない時である。其子供は親が養育料を得んがために貰つた子である。土地の破落戸（ごろつき）は短刀やピストルを以て主人公を脅かして金を貸せといふ。疥癬の男が来て主人公と同衾する。一夜に四五十匹の南京虫に責められる。主人公はこんな全ての困苦と迫害を忍びつつ、基督教を説いている。主人公は無抵抗主義者である。悪人に対して抵抗せぬ。只沈黙している。只忍んでいる。而して一歩進んで、あらゆる愛を注いでいる。主人公は人間を崇拜すると云ふ。乞食に対し、悪人に対し、淫売に対しても人として尊敬している。

貧民窟の生活は食ふや食はずの生活である。人間を本能化した生活である。之を見て、主人公は矢張り人間に失望せぬのである。毎日貧民窟の小兒を相手に喜々として遊んでいる。

此の現実の社会を見ては、他の凡ての社会が虚偽と虚飾の如く見える。著者は、鉄拳とピストルと病気に日夜脅かされている。之は真剣勝負である。之に比ぶれば、他の小説家が美しき燈と、美しき衣服を探すを以て、人生探検と

称するのを聞くと、全く馬鹿げた感じがする。

著者は日本の社会に存在する欠陥と病気を吾々に見せた。此書が出た以上、政治家も国民も、貧民窟の問題に知らぬ顔をして居る訳には行かぬ。余は人間の屑に敬意を表する主人公に敬意を表すると共に、著者が貧民窟の問題を天下に提供せられたに対して、世人と共に感謝せざるを得ぬ。⁶⁶（傍点は筆者）

賀川が「新川」で共に生活した人々は、世間からは「人間の屑」と見られた人々であつた。しかし、賀川はそうした人々を「人として尊敬」したのである。馬場はそこを見逃さなかつた。そして、五〇万以上の読者もそこに感銘したに相違ない。人間として真つ当に扱われていない人々は、何も「新川」の住民だけではなかつた。多くの人がそうだったのである。そこで大切なことは、『死線を越えて』が爆発的に売れて読まれたのは、人間として真つ当に扱われていない人々を多く生み出している「社会の欠陥」に、実は多くの人々が気づきはじめた時代になつていたということではなからうか。それが大正デモクラシーといわれる時代思潮の底流であつたのかもしれない。

「人として尊敬」すること、「人格」を認めるといふことは、賀川思想の根幹であつた。それが具体的に如何なる形であらわれているか、賀川が「新川」で体験したいくつかの事例から検討してみたい。また、労働運動に代表される大正期の社会運

動も「人格権の承認」というスローガンを掲げたのであるが、そのスローガンが賀川の言う「人格」と同じものなのか、あるいは違うのか、そうした問題に応えるための展望も考えてみた。

一、「無頼漢」との交流

1、「死線を越えて」の行間にある苦悩と葛藤

彼の「新川」での事業は、順風満帆に進行したわけではなく、そこには大きな苦悩と葛藤があった。その苦悩と葛藤があったために、沢山の人々にその事業の真実が理解され、「人格」を認めるという賀川思想が具体的に人々に理解されたのだと思う。彼が「新川」に転住した当時の日記である「露の命」などをてがかりとして『死線を越えて』の行間を補いながら、その苦悩と葛藤を追ってみた。

賀川豊彦は、一九〇九（明治四二）年二月二四日、クリスマスイブの日に「新川」に移り住んだ。住所は算合区北本町六丁目二二番地。当時、周囲は二畳敷・三畳敷の長屋が立て込んでおり、北本町五丁目と六丁目の間を南北に走る道路や、北本町六丁目と南本町六丁目の間を東西に走る道路に面して、小規模な小売り店舗が立ち並んでいた。賀川の住んだ長屋は、土地の顔役であった新家定吉が家主であった。新家は「新川」では親分と呼ばれており、次のような新聞記事が注目される。

長屋内は多勢の人込みであるため喧嘩は日々絶え間がない。大概是近所合壁の仲裁で収るけれど、若しも面倒な喧嘩になると何時でも新家定吉が顔を出して双方を満足さし仲裁するのみならず、長屋内で病人とかな止むを得ざる事情で食ふ事に困るのがあれば、定吉が金品を与えて親切に世話をして遣る為に親分親分といつて長屋全体が尊敬している。

この「親分」は後に賀川の勧めで入信することになるのだが、この義侠心に富んだ「親分」と賀川の結びつきは興味深い。不安定な「日銭稼ぎ」をなりわいとする「新川」の人々の生活にあって、新家のような存在は不可欠であった。それゆえ、新家のような人の信頼なしに、賀川が「新川」で救貧事業を行うことは困難であったと想像される。むしろ、家主であった新家にとって、義侠心は家賃収入を確保する手段であつたらうし、賀川のような店子は歓迎すべき存在だったことは容易に想像できる。

賀川が住んでいた部屋の様子は、武藤富男氏の表現を借りれば、次のようなものだった。

路地は三メートル幅。家は南向き、五畳敷の広さで、表が三畳、奥が二畳しける。しかし畳はなく、よこれた床板が露出している。戸障子はない。前年の暮れに殺人があつて血の飛散した痕が点々と壁に残っている。幽霊が出るとい

うので、借り手がなく一日七銭の家賃を月二円に負けても
らった。

まわりの部屋に比べてかなり広いスペースを借りており、こ
こが病人や「ごろつき」を収容する場所になった。しかし、何
とも殺伐とした部屋ではある。

苦惱と葛藤は居住当初から賀川を襲った。居住して一月後、
彼は日記「露の命」に「狂ひ」と題して次のような詩を書いた。
彼の苦惱と葛藤を物語る詩である。

思ひ 狂ひ／思ひ 狂ひ

祈つて 狂ひ／唯々 魔にさ、れた／…よう…ですわね…

二重人格とか云ふのは／—此那者（こんなもの—筆者）
ですかね—／ア、。

思つた様に勉強の出来ず、／思つた様に伝道の出来ず、

土の蹟も 起らず／半鐘も 鳴らず／平凡で…平凡で、

それに、不潔な、貧民窟の／—壁の色。鯨の肉の色…年
中乾くことの無ひ／—道…いやだ、…臭い。……便

所…道側の。

室と申せば、破れ障子、／—庭、—裏口の戸は開きま

せぬよ。／なぜ？ 奥の土間に一脚をすえますと開かなる
のです。／でも…仕方が無ひのですよ。奥が狭ひものです
からね。

天井のほこり…雨戸の埃。／思つてもいやですよ。

生活になれ無いとつらい／それでも一ヶ月八早や貧民窟の
生活したのですよ。

ア、恐ろしい ベスト、／…／おとめが死んだんだ。／
淫売のおとめが…二十二の馬鹿…お白いを壁のようにぬ

った。／背中に女性の生殖器を入れずみしたおとめがベス
トで死んだ、死んだ、死んだのですよ。／そのお父さん
も熱病ですと。／恐ろしいですわね。

わかりましたか、／おとめがベストで死んだのですと。／
ア、恐ろしい。

あなたにも伝染（うつり—筆者）ますよ。／サアお逃げな
さい。貧民窟うるさいですよ。

泥溝色の壁—鯨の腐肉—便所。

オ、私の心は全く／狂っちゃった。

此恐ろしい人間の墮落をどうなさいます。

私の友人—労働と悔改を約束した人さへ。／私…わた…
く…しを売りました。

花柳病者—足無し—心臓病—足の腐った男／妻を淫

売に出す男、高利売、木賃宿。

唯、取りとめもなく 頭の中を走る。／いや、眼のうらを
走る。

私ハ神経過敏性の衰弱に陥った。

ア、恐ろしい。

人間は貧民窟に住んで何の役に立つ？／心にとうとう狂ひが来た。

……

ア、夢が醒めた様だ。

コラ、オドレ！ 小供の泣き叫び、——嘆声、／……またお父さんに脇腹けられた十二三の裸体で／寢床から逃出す子じゃ無いか——

……ア、醒めた。醒めましたよ。／何か知らぬが、何故か知らぬが醒めた。

今は何時だ、——七時半——（午盾）

雫が軒にポチポチ落ちてている。／七輪の火は消えた。／近所の貧民窟がザワザワ騒ぐ。

また思ふと、また狂ふ。／貧民窟を救ふに、道は無いものか？

——四十三年一月二十六日

詩を長々と引用してしまつたが、それには理由がある。この詩のなかには賀川がその後生涯にわたって取り組んだ実践を育んだ原型のようなものが凝縮されていると思うからである。賀川豊彦は「新川」転住当初の苦悩と葛藤を「狂い」という言葉で端的に表現した。その「狂い」とは、決死の覚悟で「新川」に住んだにもかかわらず、思ったように活動出来ないこと、「狂い」であつた。詩のなかで賀川は「二重人格」という言葉を

使っている。それは、命懸けで「貧民窟」を救済しようとする意志をもつた自分と、「サア お逃げなさい」「人間は貧民窟に住んで何の役に立つ？」と思ひ悩む自分との葛藤の姿であつた。そして、思ったような活動のできない大きな理由は、想像をはるかに超える生活環境の悪さと、これも想像を絶するような様々な人々との出会い、即ち詩のなかでいう「人間の墮落」との出会いであつた。

「不潔な貧民窟」は賀川の五感をゆさぶつた。そして、そこにはびこつたベストと人間のあつと言う間の死。賀川は『死線を越えて』の中で次のように述べている。

しかし、間違つてしまった世界には、私のようなものが、いくら煩悶したつて、努力したつて役にはたさないのだ……貧民窟にはベストが入つた。女性の生殖器の中へ蛇が這い込んでいる刺青を背中に入っている、淫売のおとめが一日日死んだ。そして、昨日はその阿爺が避病院へ送られた。今朝は岐阜屋の川股という沖仲仕が同じくベストで送られたという。おそろしい、おそろしい。しかしそのベストの中にはなお、迷える羊のために、一人奉仕しなくちゃならぬように造られた、新見栄一（賀川のこと一筆者注）は、何という不幸な男であろう。……そうだ、私はベスト病に伝染して早く死のう。その方が、早く宇宙の苦悩を見なくてすむ。

この部分の記述は明らかに詩に綴られた体験に基づいている。ベストで亡くなった女性の名前は同じである。一九二〇（大正九）年に書かれた『死線を越えて』では、賀川が「新川」に転住当初体験した苦悩と葛藤が「宇宙の苦悩」として客体化されている。しかし、この詩を綴った時点では、そのような客体化をする余裕はなかった。それこそ生の苦悩と葛藤が綴られているのであり、それ故『死線を越えて』の行間にあるものを見せられるのである。

2、「悔改」と挫折

賀川が「新川」で当初出会った人物について触れてみよう。詩のなかでは、「淫売」「花柳病者——足無し——心臟病——足の腐った男」「妻を淫売に出す男」などがあげられている。こうした人々の中で、賀川に最も大きな影響を与えた男として稲木由太郎がいる。稲木は『死線を越えて』では「植木虎太郎」という名前で登場している。¹²『死線を越えて』によれば、賀川は「新川」に転住する前に「新川」で路傍説教をしていたときに植木こと稲木に知り合ったことになっている。植木は放火犯という前科があり、賀川と知り合った頃は出獄して間もない時分で、市役所の「塵芥掃除夫」（衛生人夫）をして一日六十二錢ほど稼いでいたという。植木は路傍説教をしていた賀川のもとへ自分から近づいてきたのであるが、その目的は伝道活動が金になるのではないかと誤解したことと、お金をせびることであった。

賀川が「新川」に居を構えると聞いて、植木はいろいろ世話をした。植木が世話を焼いたには理由があった。それはやはりお金を賀川からせびりとりことであった。植木は賀川が居を構えると早速そこで寝泊まりするようになり、「林」という博徒、「富田」という新家定吉（『死線を越えて』では「水田」の子分を勝手に住ませ、「富田」は自分の子分の「教ヶ島」こと「内山」を寝泊まりさせる。「林」は日記に登場する林次郎のことで、「教ヶ島」こと「内山」は「レンガシマ」こと丸山兵吉であろうと思われる。彼ら、いわば「ならず者」たちは賀川をさまざま手段で恐喝した。賀川の「新川」転住当初の一カ月は、その恐喝との無抵抗の闘争に費やされたようである。賀川はその恐喝の様子を『死線を越えて』の中で次のように描いている。

翌日、朝早くから、植木がまたやって来た。そして不景気で仕方がないから、春から浜へ行つて餅屋をするから、五円の金を貸してくれとまたいうて来た。それで栄一は植木がこの前に彼を欺いたから否じゃというた。そうすると「わしも考えがあるね、どうしても借らな承知せんのか、切れるものを持つているのか」というて「ドス」を栄一に見せる。そして、植木の顔色がだんだん変になった。¹³

賀川は日記「露の生命」の中で、稲木由太郎を「新川の名産物」と評している。おそらく、稲木という人物の中に当時の「新川」のありとあらゆる問題が凝縮していると考えたからであ

ろう。前回紹介したすさまじい恐喝もその一端である。植木（稲木）が「ドス」で賀川を恐喝した後、もっとすさまじい光景が展開する。

そこへ林がこれもまた、

『ちつと、金でも貸してもらわな、どむならん』といってやって来た。そして、植木に向かつて、『お前こんな所へ、何しに來ているんや？ また、ぐずぐずいいに來やがったら許さんぞ』と詰責している。植木は林の前にはなぜか、頭が上がらない。

『帰っていけ、帰っていけ！』という、すこすこ帰っていった。

今度は林が金を十円せひとも貸せという。そして、栄一の財布を探している。そして、また『ドス』を懐から取り出して見せる。そこへ富田がやって来る。

『林、ドスなど持つて來て、何をしていやがるんだい。帰れ、帰れ』という。林が黙ると、今度は、自分が金三十円借りたという。そして今度は、ピストルを見せる¹⁴。

強請を仲裁するようなふりをして、実は段々金額を上げていくという、植木・林・富田三者共謀の恐喝であった。しかも、『ドス』から『ピストル』まで持ち出している。

賀川はこうした恐喝にどのように対応したのだろうか。

栄一（賀川のこと―筆者注）は、破戸漢（ゴロツキ）に

いじめられているとは考えたが、『ドス』もピストルも少しも恐ろしいとは考えなかった。かえっておもしろかった。こんなことがなければ、貧民窟に來た甲斐がないと思った。それで黙っていた。一言も返事をしなかった。一言でも返事をする¹⁵と付け込んで來るからである。

むきだしの暴力を使った恐喝に対して、賀川はあくまでも無抵抗であり、「こんなことがなければ、貧民窟に來た甲斐がないと思った」と言うほど、ある種達観した精神状態がうかがえる。『死線を越えて』に記されたこの部分は、「聖者」としての強さのようなものを讀むものに伝えるのである。

しかし、それは後年の賀川¹⁶の精神状態であり、当初はそれほど達観できたわけではなかった。例えば、『露の生命』の中に「月夜／月と廊次／月と路次」という題の定まらない詩がある。これは、あの稲木田太郎の粗暴な言動とそれに対する賀川の対応を綴つたものである。その冒頭の部分を引用する。

酒に狂ふた男（稲木のこと―筆者注）は戸口で、／狂つた体操をした。

オイチニ、オイチニ、／回れ右、前へオイ。
狂つた足並みは狭い廊路に凄く反響する。

（中略）

呼び起こされて／ランプをつけて床の上に立つと／唯、足が震ふ。／……狂つた人は、何を私にするだろう——／刃

を持つて居るかも知れぬ——

酒に酔つて長屋の路地に響きわたるような号令をかけながら体操をする稲木由太郎、そして「何を私にするだろう」と足を震わせる賀川。実は賀川は強い恐怖にじつとたえているのである。その恐怖におのき涙する様子は、『死線を越えて』の中にもはしばしに描かれている。それが実態であろう。しかし、賀川もやはり普通の人間などと落としてはいけない。賀川は精神の力でそれに耐えているのであり、であるからこそ読むものに畏怖の感情をおこさせるのである。

しかも、それだけではない。賀川は稲木の言葉に耳を傾けるのである。同じ詩の中で稲木の言葉が紹介されている。

『云つて呉れたらい、でしよう／天のお父さんは私を見捨てましたか／天のお父さんは私を救ふて呉れますか。／貴子が救ふてやると云ふて下さい、／天のお父さんは貴子に力を授けたのでしよ』／『貴子は新川へ何しに来ました。／我々ドウドウシヤを救つて救つて呉れないのですか？』

稲木由太郎は賀川に「救い」を求めている。この日、稲木は六銭の酒を飲み、それでも足らなくて「レンガシマ」こと丸山兵吉（死線を越えて）では「教ヶ島」こと内山一筆者注）に五銭貸してくれと頼んだが断られ、石田という人から金を借りて飲み、さらには賀川に金をせびろうと思ひ、講義所・福音教

会・活田教会と賀川を捜し回つていたのである。こうした行動や日頃の行動から考えると、稲木が賀川に求めた「救い」は酒代に消えてしまふお金だったと言えなくもない。たしかに、そういうふうには断定したくなる。しかし、どうもそれだけではないうように思える。稲木は賀川の説教を聞いて、その一部にこだわりを見せている。「天の父さん」と「天の父さん」に力を授けられた賀川にである。また、稲木は賀川に身の上話をして、同じ詩の中では、

生まれて十五日目に／死ねと、砂地に捨てられた／由！
由太郎！／『産みの母より、育ての母』と／常に、産みの母を淫売と罵り、賭博者と罵る／薄幸兎！

（中略）

盗む為めに八幡通に放火した／十五の悪少年！

賀川がどのような機会にこうした身の上話を聞いたのか、日記からはうかがえない。しかし、こうした身の上話をするほど、稲木は賀川に心を許していたことは事実ではないだろうか。

そうした心の交流を可能にしたものは何だったのだろうか。それは、賀川が稲木のありのままを受け入れようとしたその姿勢にあったのではなからうか。その姿勢は「新川」での活動全般について見られるので、後で詳しく述べることとして、ここではそうした心の交流の中で、稲木が「改心」しようとした事実実に注目したい。同じ詩の後半に次のような稲木の台詞が登場

する。

『私が悪かった、／私が悪ふ御座いました。／私が、酒を飲んだり、煙草を喫んだのは／……あやまります。』

稲木は自分の行いを詫び、自分の生活態度を反省しはじめた。こうした稲木の態度は賀川が初めて目にするものであった。賀川は次のように詩を続ける。

彼は泣いた。彼は泣いた。／私は此を待つて居た。／監獄で教育せられた彼は／他人を愛し、敬することは知らぬのである。／キリストに来る道ハ 唯涙である。／待つて居た。

賀川は稲木の反省を「キリストに来る道」と理解し、稲木の「悔改」と見た。それを賀川は「待つて居た」のである。ここから、賀川の大きな深い感動が感じられる。

私ハ 折った。／由、稲は悔ひ改めて／今宵、二人と寝ると云ひ出した。

おそらく、賀川は稲木に対して金品を施与すると同時に、稲木の身の上話を耳を傾けながら、繰り返して神を説いたに違いない。稲木も路傍説教や日曜学校などの機会も含めて、神の教えに触れ、漠然とはあるがその一部分を理解していた。稲木はそうした体験の中で、自分の生きざまと初めて真剣に向かい合う機会を与えられたのである。また、そうした稲木の「改心」を促したのは、単なる教えだけではなく、「他人を愛し、敬する」

「人として尊敬」するという態度を貫いている賀川という人が身近にいたからであった。

賀川は、稲木の「悔改」＝「改心」を素直に受け止めた。日記「露の生命」に記された「明治四拾参年参月救霊団」という活動報告を見ると、「新川」で二十八人の「改心者」が記録されている。その中には、もちろん稲木由太郎がいるし、彼と同じように賀川を恐喝するような「無頼漢」が多数含まれている。また、そうした「無頼漢」の「顔役」である新家定吉は、「求道者」として記録されている。

しかし、「改心」したはずの稲木は、しばらくすると、また酒を飲み賀川にお金を要求するようになる。日記には「忘れられぬ祈祷会三月九日」と題して、次のような記述がある。

五時半帰ると、稲木氏は酒を飲んで居る。／『荷を質入れましたぞ……一円二十銭に』と云ひ放った。／酒を飲んで居る。／祈祷会は私が布れて、九人集った。祈祷会の前に彼ハ刃を以て居る事が知れ、彼は悦んで胸のボタンをはずして大に狂ふ。／『金を貸せ！金を貸せ、飲むんじや。金を貸せ』と叫ぶ。

皆折った。宇都宮氏も泣き、余も知れず涙が出た。

（中略）
そして、『敵を愛せよ』との説教して居ると、稲木来たり、『敵とハ我輩の事か』と云ふ。

稲木はこの二日後に下関へと旅立っていった。それから、三週間余りたつてから、稲木から賀川のもとへ手紙が来た。その手紙には、肋膜炎にかかったから金をくれと書いてあった。いったい、稲木の「改心」とは何だったのであろう。賀川の落胆の大きさが、「余も知れずに涙が出た」という記述から伝わってくる。

小説「死線を越えて」の中では、植木こと稲木が「悪かった」と謝る場面が出てきており、前後の情景からすると、紹介した詩に描かれている出来事をもとにしていることがわかる。しかし、肝心な部分、つまり賀川が稲木の「改心」に立ち会って深く感動する部分が、『死線を越えて』には描かれていないのである。おそらく、賀川は稲木のその後の行動を見て、稲木の「改心」が真の改心ではないと判断したのであろう。

賀川は実は何回も同じような体験をしている。稲木由太郎との関わりは、その典型的な体験の一つであったにすぎない。例えば、前述した二十八人の「改心者」の一人に、丸太市太郎という人物がいる。彼の妻の丸太てるも「改心者」の一人である。彼は妻が「姦通」したことに怒って、賀川の家へ逃げ込んだ妻を追いかけてきて暴力をふるおうとし、賀川の家を障子を木っ端みじんに壊す。そして、「反抗しますぞ、先生。私を止めるなら反抗しますぞ。」と言いながらあばれまわつて、遂に巡査に派出所へ連れていかれた。また、同じく「改心者」の一人に小寺

という男がいるが、彼も「改心者」と書かれた後に、「五円盗まれた」と賀川に言いがかりをつけ、金をせびりとろうとしている。さらに、『死線を越えて』の中で内山として登場する丸山兵吉。彼は、稲木・丸太・小寺のように賀川を恐喝することなどない。むしろ、喧嘩の仲裁に入ったり、賀川を恐喝する男たちをたしなめたり、賀川の家にいる病人の介護を手伝ったりなど、賀川に最も協力的な人物であった。しかし、その丸山も全く働こうとせず、遊び暮らしている。それが、「改心」の実態であった。

「改心」と挫折の連続。そうした中で、神の救いを最も強く求めていたのは、賀川自身であったかも知れない。「天の父様」みなを崇めさせ給へ。キリストの十字架の力を充分味せ給へ。」と唱えながら、長い時間跪いて祈る。また、「発明。発見。」という詩の中では、自分の手の中に「神の国の窓」と「神の国の土塀」を見ている。賀川は真剣に神に近づこうとしている。そして、神の教えを伝えようとしている。その伝道は、人々を導くという目的と同時に、自分を奮起させるためでもあった。既に、二月十六日には「狂熱伝道者覚悟」と題して、次のような決意を述べている。

一、我等の狂熱には群衆の後援なし。

き。
されどもジウジ、フォクスクス¹⁶の狂熱には後援なかり

二、然れども狂熱伝道には規律的伝道的激熱を要す。而も我等ハ外部的規律の後援なし。

ウエスレ¹⁷の馬上説教を思へ、ブース¹⁸の自動車説教を思へ。

三、朝は讚美伝道をなすべし。五分間説教をなすべし。

四、昼は正午の労働者に語れ。

五、夜ハ 呼唱せよ、辻に立てよ。

六、狂熱ハ リバイバルに非ず、狂熱は伝道也。

二、女性と子供の人格

1、「家」と「名誉」

賀川豊彦が活動した当時の「新川」の悲惨さは、女性に最も集中していた。大半が法的婚姻関係にない事実上の夫婦関係の中で、女性は母として、妻として、子供として生活の重荷を背負われたのである。その仕事は、家事・育児を一手に担うと同時に、様々な職業について家計そのものを支えていた。職種は多種多様で、工場勤めやマッチの箱張りの内職、屑拾い、はては淫売婦や乞食、そして「貰い子殺し」にまで及ぶ。賀川は「新川」における女性の生活の有り様を、全て具に見ていたのである。後半では、「新川」の女性に焦点を当て、当時の都市「下層社会」の実態、そこに住む人々の心性、そして賀川の思想と実践の意義を考えてみたい。

日記「露の生命」には、「大和」の母という女性の自殺について次のような記述がのせられている。

八月十五日（明治四十三年一筆者注）

朝、「大和」の母が首縊つて死んでいた。

隣の石田さんの内でお見舞を云ふと、今しも警察官が来て死体を取り去っていた処であった。老婆は昨夜十二時になくわ瓜食ひたいと云ひ、甘酒が飲みたいと云ひ、飲み食ひのしただけ食ふて、一家五人が三疊敷に寝しずまると共に、隅の釘に帯で、炬燵を出せと昨夜出させた炬燵に上つて、とうとう死んで終つた。死は可哀相だが、大和の仕打ちもひどい。老婆ハ乞食に出て居たのだ。私も見たことがあるが、老婆ハ乞食でも、「大和」ハ大飯酒の善い物食ひであつた。

大変短い記事ではあるが、「新川」では普通に見られる家庭の様子がうかがえる。「一家五人が三疊敷」の一間で生活している。息子は「大飲酒の善い物食ひ」でありながら、老婆となつた母を乞食に出させている。賀川はそうした「大和の仕打ち」を、当然の如く非難している。

老婆を自殺に追い込んだものは何か。老婆はおそらく自殺を覚悟した後、最後に自分のしたいことをしようと思つたのである。そのしたいことは、真桑瓜を食ふることと甘酒を飲むことであつた。そうしたささやかな「贅沢」すら、老婆は日頃

したことがなかったのであろう。というより、そこまで切り詰めていたのであろう。しかし、息子の「大和」には「大飲食」を許している。自分は乞食に出てまで、それを許しているのである。何故、そこまで許すのであろうか。「大和」の母の個性と言つてしまえばそれまでであるが、どうもそれとは別の、当時の人々に広く浸透していた生活を縛る根強い觀念のようなものがはたらいているような気がする。

賀川が転住する二年ほど前であるが、神戸新聞の記者が「新川」に短期居住し、人々の生活の有り様をルポルタージュにまとめたことがある。その記事によれば、記者が世間話をした隣家の女房が、「女房持たぬものを意気地なしと罵る気概」を見せ、長屋の住人も、「自分以上に女房・子を養ふのを無上の手柄」にしていると指摘している¹⁹。また、賀川も『貧民心理の研究』の中で「貧民の『家』に対する觀念」と題して次のように述べている。

一軒の家を持つと云ふことは貧民にとつては非常な名譽であるのだ。(中略) 彼等がその家を重じると云つたら話にならない。それで、それが、どんなに穢い家であらうとも宿屋住ひより増であるのだ。だから貧民窟の人は、「宿屋住ひ」のものを決して同類質と思つて居ない。貧民窟では、あれは「宿屋住ひですよ」と云えば、責任も義理も人情も知らぬものと同様の意味をなして居るのである。²⁰

ここでいう「宿屋住ひ」とは、木賃宿に宿泊することであつた。それに対して「家」とは借家であれ、一つの所帯をもつことを言う。所帯をもち、それを維持することを「新川」の人々は「非常な名譽」としていた。その名譽が「新川」住民の日々の労働と生活を支える觀念だつた。

近世後期から民衆レベルで近代家族が進みつつあつたが、筆者は、その家族形成が男性に社会的労働を担わせる一方女性を家庭内に押し込めていく方向性をもつていたという点で、近代家族形成としての共通の指標をもつていてと考えるが、同時に、「家」という日本社会の特質をあわせ持つていたと理解している。即ち、西欧社会のような個人の人格の尊重を歴史的前提とした家族ではなく、「家」という団体が個々人の人格を決定するという觀念が強い家族であつたということである。明治末にはその觀念が一般的な社会的規範として確立しており、「家」|| 所帯を形成・維持してはじめて一人前であるという通念が支配的になつていた。それゆえ、例え近代家族の確立にはいたらなくとも、まがりなりに「家」|| 所帯をもつていた「新川」の人々にとつては、それを形成しえない木賃宿住まいの人々が蔑みの対象となる一方で、自分たちが「家」|| 所帯を形成しているそのことが「名譽」と觀念されるのである。また、その「名譽」によつて「新川」の人々の生活は縛られていたのである。理想としては、夫は大黒柱として「女房・子を養うのを無上の手柄」(|| 名

「替」とする姿であり、女房ももてない男は「意気地なし」と罵られるのである。だが、「新川」の多くの家庭の実態は、男一人で女房・子供を養うような稼ぎが出来るような状態ではなかった。しかし、それを「非常の名替」とする以上、夫が大黒柱であるという体面は取り繕わなければならないし、宿屋住まいに「転落」しないように最低限所帯は維持しなければならない。そこで、理想とは明らかに矛盾した姿ではあるが、妻・子供、さらには祖父の労働が不可欠となる。

多くの人々は、「金銭的な豊さ」を最終的な目標として一所懸命労働しているわけではないであろう。「金銭的な豊さ」を求める根底には、なにかの理想、生きる支えとなるような観念、乃至は生活規範があるはずである。経済活動はそうした心の働きによって成り立っている。この問題は、賀川が一貫して経済における精神の重要性を考えたことにつながっているかもしれないが、「新川」の人々も例外ではなかった。「大和」の母が乞食までした理由は、そのことに関係するのではあるまいか。息子の「大和」が「大飲酒」では、なおさらのことである。「大和」は一家の大黒柱であるから、実際には出来ないことであるにもかかわらず、女房・子供を養うことを期待され、それ故「善い物食ひ」も認められている。当時の家庭では一番の御馳走は父や夫にまわされた。同時に、父や夫の表向きの責任も重かったはずである。「大和」の母は、そうした表向きの「名替」＝理想

と現実の間で苦悶していたのではなからうか。ささやかな贅沢すらせず、乞食にまでなつて家計を支えた現実に疲れたのである。筆者が、いささか考えすぎているのかもしれないが、「まくわ瓜が食べたい」「甘酒が飲みたい」と最後にわがままを言つて自殺した「大和」の母の気持ちとその奥底に孕むものを、私たちは読み取る努力をしなければならないような気がする。賀川も、あえて「大和」の母の自殺を日記に書いたということは、「これはないがしろにできない」という思いを抱いたからであろう。

2、「貰い子殺し」

ところで、賀川のこの事件に対する見方はある意味で現代的である。「大和」の「善い物食ひ」を非難の目で見ている。賀川は、女性や子供の人格と成長を大切にしたい。それは、表向きの「家」＝所帯を名替とする観念に対する挑戦であった。そうした考え方に立つ以上、当時「新川」に横行していた「貰い子殺し」は、賀川にとって許しがたいものであったし、また、賀川の思想と「新川」の現実とのギャップや葛藤を知る上で、最も恰好な素材でもある。

「貰い子殺し」とは、生まれたばかりの子供を、幾らかのお金を払つてそれをなりわいとする女性に預け、預かった女性は子供に食べ物を与えず殺してしまうことである。明治末期には、前述したような家＝所帯を維持することを名替とするような観

念が強かったがために、それに差し障りがあると考えられた場合、「貰い子殺し」に出された。産みの母が平然とわが子を「貰い子殺し」に出すとは考えにくいので、母としての本音を押殺さざるを得ないような、深い事情があったと考えたい。単なる「貧困」と表現するにはあまりにむごい、そして、そのむごさを成り立たしめているような観念があつたと推測したい。

問題は、それをなりわいとする女性があつたことである。賀川は「貧民心理之研究」の中で、「新川」に「数百人の貰ひ子があることは決して疑はない」と述べている。誇張であつて欲しいとおもわず願いたくなるような恐るべき数字である。こうした「貰い子」は一体どこから来るのか。武藤富男氏は『評伝賀川豊彦』の中で、「貰い子殺し」の原因について次のように述べている。

正常な関係によらずに婦人が子を宿す。妊娠中にこれを処理すれば堕胎罪として七年以下の懲役に処せられる。これが恐ろしいので分婉してしまふ。処置に困る。若い女性が正式に結婚する妨げになる。親兄弟の間体が悪い。しばらく隠しているが、隠しおせないの、ひそかにこれを片づけようと思う。しかし殺せば殺人罪、棄てれば幼児遺棄罪となり、いずれも一年以下の懲役に該当する。ここに「貰い子殺し」の遠因がある。

もう一つは、深刻な生活難である。子が生まれたが失業、

病氣、貧困、その他の事情により、わが子を育てる力がないう、そこで育児意志を失つてしまふ。子を処理することによつて我とわが家族だけが生きていこうとする場合も、同じように恐怖がある。ここに「貰い子殺し」が起る第二の原因がある。

賀川は「貧民心理之研究」の中で、この武藤氏があげている二つの原因のうち前者を重視し、「貰い子殺し」のシステムを、「主として私生児、不義姦淫の子を安全に殺す機関」と位置づけている。とすると、「貰い子」の供給源は所得の少ない人とは限らないことになる。賀川は同書の中で、「多くは市外から貰はれてくるが、また中には、善い人の裔も折々は有るのである」と述べており、「善い人」、即ち裕福な人がむしろ供給源である場合も多かつたことをほのめかしている。

そうした「貰い子」が「新川」に集まるからくりはどういうことなのだろう。賀川は同書の中で次のように述べている。

私の今迄見た数十名の貰ひ子殺しに就て見るに、その多くは一時いくらか固つた金を融通するためである。貧民に一度に五円の纏まつた金を得ることは余程困難である。それで子供一疋を買つて世話して五円なり拾円なり一度に融通をつけて呉れるならば貧民は飛びつくのである。之が全く貧民貰ひ子殺しの初めての動機である。考えて見れば気の毒なものである。処が幸にして嬰兒が早く死んで呉れる

と、その甘い味が忘れられない。二度目に貰ふ。さうすると口入屋はちゃんとその人を花客にしてしまふ。さうして遂には常習的になるのである。

「貰い子殺し」によつて、十円、五円といった金が一度に手に入る。「新川」の事例ではないが、賀川が新聞記事で拾つた十一家族による「貰い子殺し」の理由のほとんどは「生活難」であつた。ここで供給源の問題をもう一度考えてみると、十円、五円といったある程度まとまつた金が用意できなければ、「貰い子殺し」には出せない。したがつて、「新川」で生活する人々にはとてもそんな余裕はないから、「貰い子」を出す側にはなりえない。もつぱら「貰い子殺し」を請け負う側になる。ある程度生活にゆとりのある人が、「世間体」を気にして「貰い子」に出し、口入屋がそれを周旋して、「新川」に住んでいるような「生活難」にあえぐ人に殺してもらつて、医師が「貰い子殺し」と知りながら死亡診断書を発行する、そして最後は「新川」の葬式大夫がわずかの手間賃で遺体を煙草の箱や蜜柑箱に入れて春日野の火葬場に運ぶ、という仕組み構造が出来上がつている。賀川も指摘しているように、嬰兒殺し一般は「貧民」に多い犯罪なのであるが、「貰い子殺し」は供給源が違うのである。

「貰い子殺し」に出す方の「世間体」とは、武藤氏が指摘しているように、「正式な結婚」の妨げとなるということであり、「親兄弟」の体面の問題である。即ち、前回指摘した家Ⅱ所帯を

維持することを名譽とするような觀念が、より一層強い形であらわれているのである。一方、「新川」のような地域で「貰い子」を処理する側も、家Ⅱ所帯の維持のために「貰い子殺し」を請け負うのである。こちらでも、「世間体」が問題になる。例えば、賀川は次のような例をあげている。

然し之（「貰い子」一筆者注）が早く死な、い場合にはそれこそ可哀想である。子供より親の方が早く死ぬことがある。箕形おいちの様に五十人も六十人も井戸の中へた、き込んでしまへば何でもないが大抵はそんな勇氣は無いから、米の粉を汁にといて与へて死ぬのを待つて居る。勿論乳は始めから無い。ところが死んでくれない。病気になる。キアキア泣く。近所の評判が悪い。仕事には出られない。医者にはようかけない。持ち廻るにも恥かしい。子供は百日たつても梅干の様だとすると、それこそ悲惨で見て居られない。

「貰い子殺し」を半ば商売としているような夜叉の如き人もいるのだが、「生活難」のため、所帯の維持のために止むなく「貰い子殺し」をするような人々がおそらく多かつたのであろう。そうした人々は、あからさまな殺害をやるほどの勇氣がない。米のとき汁を与えて、出来るかぎり静かな死を願つているのである。所帯の維持という「世間体」、あからさまな形で子供を殺すことが憚られる「世間体」がある。

以上のように、「貰い子殺し」を成り立たしめているのは、単なる経済的貧困ではない。「新川」などのいわゆる「下層社会」のみならず、社会全体を巻き込んで、「世間体」という建前の世界を維持するために作りだされた、何とも悲惨な闇の世界なのである。この闇の世界に立ち入り、光をあてようとしたのは、おそらく賀川が最初ではなかったらうか。

武藤氏の前掲書によれば、賀川が最初に「貰い子殺し」に直面したのは、一九一〇（明治四三）年の正月であったという。日記「露の生命」には、「一月二日 葬式」、「一月五日 石田葬式」という簡潔な記事がある。小説「死線を越えて」によると、この葬式というのは、「貰い子殺し」で亡くなった子供の葬式であり、その情景が生々しく描写されている。二日、賀川は丸井という人から姉の子供が死んだので葬式代をくれと言われて、その家に行ったところ、栄養失調で亡くなった赤ん坊を見た。丸井という人は吾妻通六丁目に住んでおり、表五畳・裏二畳の二間に丸井一族六人と姉とその子供二人の合計九人で生活していた。五円の金ほしさに「貰い子殺し」を請け負ったのは、その姉であった。自分の子供を二人かかえながら、「貰い子殺し」に手を出したその女性の心理はどのようなものであったらう。しかも、丸井一族六人も明らかに現場を見ているはずなのに、それを黙認し、賀川に葬式代をせびるのである。しかし、さすがにはつきりと「貰い子殺し」であるとは言えなかった。

五日には、石野という夫婦に「宅の子供が死んだから」と呼ばれて、二人目の「貰い子」に会った。この石野とは、『露の生命』に記された「石田」のことであろう。出口という人の曰く、これが石野夫婦にとっては三遍目の「貰い子殺し」であった。そして、「もらい子をしては殺し、そのたびごとに家を変えるんですが……近所に恥ずかしいさかい」と出口は言うのである。また、石野は毎晩妻に淫売させて、自分はその立ち番をして生活しているとも言ふ。賀川は赤ん坊の葬式代を出した上に、「新川」で初めてキリスト教の葬式をした。そして、この葬式こそ賀川が生まれて初めて施行した葬式だった。

3、淫売婦

「新川」の女性の多くは、前回紹介した「貰い子殺し」も含めて、様々な「内職」に従事していた。それは、いずれも多就労世帯の維持を目的に行われるものであり、「家」に所帯を構えることを無上の名譽と考える觀念や建前に縛られたものであった。その中で最も多くの女性が従事していた内職は、マッチの箱貼りであった。賀川は、新聞に「神戸の貧民窟」という記事を寄稿し、その中で次のように述べている。

貧民窟に帰って、家を覗くと、女達は早くマッチにかかっている。箱千、皮巻き千で八銭！ 二千五百はる女は朝五時から晩十時までかかる。それで一千のマッチには一銭の「ノリ」²³がある。

一日十七時間ぐらい貼っても二千五百個が関の山で、しかもその手間は二〇錢ほどにしかならず、さらに糊代まで負担させられる。当時、沖仲仕などの日稼人足が一日五〇錢ぐらい稼いでいたのと比較すると、その半分以下にしかならない。ところが、それでもまだ内職としてはまともなものであった。最もひどい「内職」が、乞食と淫売である。賀川は前述の記事の中で次のように述べている。

怠け者は寝伏っている。女が一人働いて此男に食はず。勿論正当に働いて食はせる筈はない。乞食せねば淫売。それで又喧嘩が起る。此世智辛い世の中に夫に怠けられて女が働かなくちゃならんといふのは情ない話だ。之で堪へ切れぬ時は又男を拵えて逃げるまで。

乞食と淫売は、怠け者の夫を養うための手つとり早い「内職」だという。これらの「内職」は、もちろん女性たちが喜んで従事するような性格のものではない。それには、夫の強制がはたらっていた。賀川は次のように嘆いている。

彼らの暗黒面は寧ろ悲壯だ。彼等は総て人妻であり、夫に強ひられて淫売に出る始末だ。思っても悲惨じゃないか。だから、淫売を妻とするものは、一度に十人位の妾を持っている訳だ。

いやだったら夫から逃げればいいじゃないかと思うが、しかし、次のような不可解な事情があった。

男は女を離縁する場合、女から金五円を請求する権利がある。そして九分まで金五円に決まっているから可笑しい。そして、金五円出来ない為に一生男の圧迫の下に肉の奴隷として居る女も少くは無い。

この五円の支払いを強制されるという法的な根拠は見当たらない。そもそも、離縁するも何も、もともと正式な婚姻関係ではないのだから、法的な制裁をうける理由が全く無いのである。賀川によれば、「博徒の末輩」のような男たちが、「新開地あたり」にブラついて墮落した下女・仲居などを餌食にして、売春をやらせることも多かつたようなので、逃げることを許さないような組織的暴力がはたらいたのであろう。

五円という、いわば「足抜け」代は、当時の賃金から考えて簡単に支払えるように思うのだが、亭主や子供を養い、その日その日を余裕のない状態で生きている彼女たちにとつては、なかなかためることが出来ない金額だったようだ。さらに、何らかの事情で独り身となり、その上子供を養っていかなければならぬなどの事情が重なってくると、やめるにやめられないケースも出てくる。しかも、仕事柄長く淫売を続けていると次のような悪循環に陥ると賀川は言う。

勿論、淫売だつて女だ。人間だ。足を抜きたいと思ふ。然し一晩三、四人の男を取った所で常は病氣して食費一日二十九銭の払いが溜り溜って、二晩か三晩働いたって追ひつ

ける事では無いやうになる。かうなると地獄。又出る。一箇月に屹度一度警察。十五日位御厄介。此が度重つて身体がだんだん弱る。知れてる事。六〇六号も効力が利かなくなる。破れかぶれ、酒も呑むわ、賭博も打つわ、喧嘩もするわ、そして死骸のやうになつて男に見捨てられ、市役所も世話して呉れず、社会的自殺を遂げるのだ。乃ち刃も毒薬もなしにかうやつて甘い事死ぬるのだ。

当時の日本には公娼制度というものがあつた。遊廓など行政機関が認めた場所以外での売春は禁止されていた。「新川」などでおこなわれる売春は街娼によるものであるから、淫売婦は警察のとりしまりの対象となつた。それが一斉検挙といふかたちで月一回ぐらいの割合で実施されるのである。しかし、こうした警察の取締りが街娼の撲滅をめざして行われたのではなさそうである。公娼制度という建前がある以上、一応取締りはするが、それはおざなりなものであつた。第一、撲滅を目指すならば、検挙した後で淫売婦を保護するような何らかの施策がなければならぬが、そうしたものは一切見受けられない。むしろ、前述の賀川の指摘が述べているように、定期的な検挙と収監が淫売婦の肉体的苦痛を強め、彼女たちの死を早める機能しかもつていないように見える。おそらく、街娼は公娼制度を補充する役割を担つており、公権力はむしろ黙認と言つてもよいような姿勢だつたのではなからうか。

賀川が数えたところによると、こうした淫売婦は「新川」に二十人くらいいたといふ。それが、吾妻通五丁目と六丁目の角に「浜」といふ働き場所があり、そこに集まつて「営業」してゐた。賀川はそこに頻りに出向き、彼女たちに冷やかされながら、彼女たちと繰り返し対話してゐる。その対話とは、あくまでも同じ人間同士としての対話であり、賀川は彼女たちの人格を認めた上で、友人として接しようとしたのだ。当時の社会では強く蔑まされ、彼女たちとまともに対話しようなどという人がいない状況の中でのこうした賀川の行為は、おそらく希有のものであつたらう。それ故、淫売婦たちも賀川を「先生、先生」と呼んで親しく接しており、気軽に自分の身の上話や、今の心境などを賀川に物語つたのである。その話の一端は、一九二二（明治四五）年の賀川の日記である「心の日記」²³や小説『死線を越えて』に描写されている。

「心の日記」の中には、淫売婦たちとおそらく彼女たちの夫であらう男性からの聞き取りが、「怠惰表」といふ形で集計されている。この名称からもうかがえるように、賀川は彼等の生活スタイルを「怠惰」として認識し、その「改心」を促す。そして、その「怠惰」の原因として彼等の心境をあげてゐる。「はたらくのは嫌い」、「淫売すれば外の仕事が馬鹿げて出来ぬ」、「労働は下等」、「楽な仕事がない」、「淫売だつて仕事のうちだ」、「楽がしたい」などの気持ちが語られてゐる。賀川はこうした心のも

ちようを「怠惰」の原因と位置づけているのだが、多分に淫売をしていくことの正当化という側面が強いように思える。それはおそらく賀川も充分わかっていたのであろう。でなければ「淫売だつて女だ。人間だ。」とは言い得なかつたであらう。日記「露の生命」の中にはある女性の「淫売婦になる経路を聞きたり」という記事があり、それに続けて「悲惨！悲惨！」と記している。おそらく賀川は、こうした聞き取りを繰り返して行っているとと思われる。また、「淫売婦に薬を与ふ」という記事も見られる。

賀川は、彼女たちの心のもちようを「改心」させるのは非常に難しいと考え、「此の種類の感化事業は世界で一番骨の折れる事業だ」と述べている。だから、淫売婦が生まれてくる仕組みを賀川は問題にしたのである。精神運動は賀川の事業の基盤であるが、そのみではどうしようもない現実と直面した。また、亭主をたてなければならぬという

「家」Ⅱ所帯の規範や建前に直面し、それに挑戦せざるを得なくなつた。

おわりに

賀川の「人として尊敬」する、「人格」を認めるという思想が、当時の社会矛盾が凝縮した「新川」という場において、具体的にとどのような形であらわれていたのかを、極めて不十分な形で

ではあるが、いくつかの事例を参考にきてきた。賀川の無頼漢や淫売婦に対するはたらきかけは、つかの間の「改心」と大きな挫折の連続であつた。しかし、その中で無頼漢がつかの間の「改心」という行為を通じて自分の生きざまと初めて真剣に向き合う機会をもつ例があつたり、淫売婦が自分の心情を吐露する機会を得た例があつたことは重要であり、それらの人々は賀川への告白によつて自分を客体化し、幼児の頃から社会的に疎外されてきたという悲痛な体験を再認識することによつて、自己の人格を確立するための土台が得られたのではなからうか。賀川が目指したものは、その土台の上に、稲木が一時示したような、自己の行為を罪とし、それを懺悔することによつて「改心」「悔改」がおこなわれ、そのことを通じて人格を確立することであつたと考えられるが、それは無残にも失敗した。

その失敗の大きな原因は、「無頼漢」や「淫売婦」、あるいは「貰い子殺し」を作り出してた基盤の強固であつた。その基盤とは、単なる社会構造ではなく、それと不可分の関係にある規範としての「家」ではなかつたらうか。賀川は必然的にその「家」の規範と闘うことを余儀なくされていった。

(1) 村島婦之「労働運動昔はなし(7) / 「死線を越えて」の裏はなし
— 賀川豊彦追想録 —」、『労働研究』一四九号、一九六〇年七月、二四頁。

(2) 横山春一「死線を越えて」の記録、「賀川研究」第四輯（ガリ版刷り）、一九四二年五月。

(3) 同前。

(4) 村島前掲論文、二二―三三頁。

(5) 鹿野政直「日本の歴史27 大正デモクラシー」、小学館、一九七五年。

(6) 注(2)に同じ。

(7) 鈴木正幸「近代天皇制の支配秩序」、校倉書房、一九八六年。

(8) 米沢和一郎・布川弘編「賀川豊彦初期史料集」、三八九―四五〇頁に所収。以下、特にことわらない限り、「露の生命」についての記述は同書を参照。

(9) 「神戸又新日報」、明治三十四年八月三一日付。

(10) 武藤富男「評伝賀川豊彦」、キリスト新聞社、一九八一年、九頁。

(11) 賀川豊彦「死線を越えて」、社会思想社、一九八三年、二四八頁。

(12) 賀川と「樅木」の出会いについては、同前書三〇〇―三〇四頁を参照。

(13) 同前書、三三八頁。

(14) 同前書、三三八―九頁。

(15) 同前書、三三九頁。

(16) George Fox 1624-91 クウェーカー派の創始者。

(17) メソジスト教会の創始者。

(18) William Booth 1829-1912 救世軍の創始者。

(19) 「師走の新川生活 第三信」、「神戸新聞」、明治三十九年二月二日付。

(20) 賀川豊彦「貧民心理の研究」、東京奮醒社、一九一五年。以下、「貧民心理の研究」については、特にことわらない限り同書を参照。

(21) 藪田貫「女性史としての近世」、校倉書房、一九九六年。

(22) 武藤前掲書、三七―四〇頁。

(23) 「神戸新聞」、明治四十四年七月三一日付。

(24) 米沢・布川編前掲書、七五七―八四二頁。